として思い描いていた要素を全て持っていた。平野さんは決して妥協はしない。この店で扱う商品は、県内の他店では扱っていないもの、存在感あふれるもの、オシャレ感が漂うもの、優れたデザインのものと決めていた。その思いは香陽子さんの心にも届いていた。

人と人とのつながりの中で

『Caro Angelo』をオープンし、平野さんは、地域の人達とのつながりを強く感じたという。ただ単に「売り手」と「買い手」ではなく、お店に足を運んでくれるお客様との人間的なつながりを大切にしていきたいと。町屋の坪庭だった中庭は、オリーブが植えられ、素敵なパティオになっている。仕事が終わってからそこでビールを飲むのが最高という平野さん。お気に入りスポットで、しばしばお客様とパーティを楽しむそうだ。

お店にはオシャレなイメージにピッタリのスタッフさんがいる。商店街への憧れを平野さんと共有する弟の平野朋宏さんと、もともと『Caro Angelo』のお客さんだった山田一也さんの二人だ。山田さんは、長浜市の浅井出身。自分が求めているブランドの商品が、彦根まちなかにあることを知り、店を訪れたことがきっかけだった。セレクトショップの商品アイテム、ディスプレー、そしてほの暗い町屋の佇まい。その全てからオーナーのこだわりが伝わってきた。スタッフとして手伝いながら、自分のショップを持つ日を夢みている。

アットホームな雰囲気のなかで、商品の良さを知る店員とのやりとりを楽しみながら、本当に自分に合うものを手に入れる。セレクトショップは、感性の共有、共感の場でもある。香陽子さんは、言う。「自分が買い物に行って思うことは、やはり《人》だなぁ…」と。

商店街への想い

平野さんは、常に商店街の将来を考えている。その時だけのイベントで人集めをするのではなく、リバーサイド橋本通りや彦根まちなかに店舗を増やし「商店街を人の集まる場所にしたい」と。橋本通りには、昔からある老舗の飲食店、鮮魚店、呉服屋さんのほか、主婦達が営むレストラン、スイーツのお店など新たな店舗も少しずつではあるが増えてきた。

「商店街を華やかに…」。そう語る平野さんが目指すのは、「どこにあっても通用する店」。数年後には、フラワーショップを独立させ、十年後には、複数のショップをまちなかで経営したいという。

「old new town…古さと新しさの共存から、まちを蘇らせる」。

平野さんの静かな語り口から、商店街に対する秘められた情熱と決意が伝わって来る。

右ページ：東京ほか全国各地から、オーナー、スタッフが商品を仕入れている。メンズ＆レディースアイテムから、この店にしかないこだわりが感じられる。

右上:二階奥フロアーは、トップス、アウター、ボトムスほかのコスチュームやバッグ、靴などのセレクトアイテムが並ぶ。時には、フィッティングで新しい自分を発見してもらうことも。
左上：コットン素材のカジュアルバッグ。
右下:店内照明にもオーナーのこだわりが。ハンドメイドの照明器具は、近江八幡にある「Atelier Key-men 船着場」の製品である。
左下：スタッフの平野朋宏さんと山田一也さん。洗練されたコスチュームでフロアーに立つ二人の接客には定評がある。

ほっと湖東ライフ③ 協力隊員篇

地域に新しい風を吹き込む

平成二十五年四月、多賀の中山間集落水谷地区に、二人の地域おこし協力隊員が派遣された。この村は、長い間ダム建設予定地であったが、平成二十一年に計画が変更され、ダム建設が中止となった。集落コミュニティの再生という使命を負い、村に入った協力隊員への期待は大きい。地元の人々とともに、日常すぎて気付かないモノやコトの大切さを発見し、地域に新しい風を吹き込む協力隊員の姿を追った。

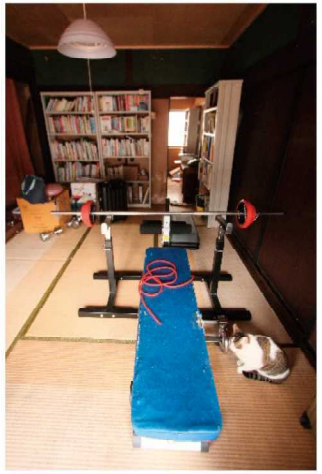
染森義孝さん
多賀町水谷

母を想う…

私たちが、染森義孝さんに会ったのは、二度目だった。

集落の道路まで出迎えてくれた染森さんは、とても穏やかな笑顔でお宅へと案内してくれた。染森さんが住む古民家の周辺には、新しく建てられた家や、改修された古民家が建ち並び、集落再建に取り組む地域の空気が伝わってきた。

染森さんの家の土間には、大工仕事のための作業机が置かれ、家の中では、三匹の愛猫たちが、出迎えてくれた。大阪の出身の染森さんは、プロテスタント教会の牧師という仕事柄、これまで神戸・奈良・島根・播州・茨城・北九州…と、全国各地に亘り暮らしてきた。そして、いまこの多賀町水谷で「地域おこし協力隊員」として集落コミュニティの再生に係わりつつ、自らも新しい道を切り拓く日々を送っている。



右上：芹川上流にある水谷の集落。集落の戸数は、おおよそ２０戸。手前の茅葺きトタン屋根の家が染森さんの住まい。
左上：染森さんが健康を維持するために室内で使用しているパーペルセット。
右下：芹川に沿って針葉樹と落葉樹の美しい混交林が続く。さらに上流に向かうと水谷集落に入る。
左下：水谷に来てから家族の一員となった「バッテラちゃん」。

中山間のこの土地に染森さんが移住するきっかけとなったのは、島根県農業経営課からの情報によるものだった。島根県は、早くから過疎が進み、行政課題として空き家対策や地域振興に取り組んでいる。スカウトマンから「広島で説明会をしますから来ませんか?」と情報を入手した染森さんは、当時、暮らしていた北九州から広島の説明会に参加し、そこで初めて『地域おこし協力隊』の存在を知った。

「島根から来てほしいと熱望されたが、大阪に八十一歳の母が一人きりで居るので、これからの母の世話のことも考え、大阪との交通利便性の高い、滋賀県湖東地域に関心を持ったんです。過疎で困っている地域の力となって働きながら、自分自身はそこで農業を学び、自然環境を守る仕事をしたいと思い、応募しました」。

母を想いながら、水谷での暮らしを選択した染森さん。初めての土地で、「地域おこし協力隊員」としての任務に自然体で取り組もうとする姿が地域から受け入れられるのに、そう時間はかからなかった。

「地域おこし協力隊員」の仕事

多賀町水谷における「地域おこし協力隊員」の仕事は、水田の再生、農産物の販売、獣害対策など。耕作放棄された田んぼの再生、稲作の復興という課題を抱

えた地域であることを知り、染森さんは、さまざまな技術を取得し、この地へ臨んできた。まず建設重機の資格を取り、そのあと半年間かけて、北九州の職業訓練校で大工の仕事に役立つ「住宅リフォーム技術科」を学んだ。そこで学ぶ仲間とともに、協力して家を建てた経験から、《all for one, one for all …すべては一人のために、一人はみんなのために》というスピリットを体得できたことも、染森さんにとって、大きな力となった。地域おこし協力隊の採用が決まり、どんな仕事でもできるように製作した作業台。それが、染森さんの自宅土間に置いてある、大切な大工道具だ。

「木を使った仕事もしていきたい」。

手作りの作業台を眺めながら語る染森さんからは、地域おこし協力隊員としての決意の堅さが、強く伝わってきた。

野菜づくり奮闘記

水谷での農作物づくりは、今までとは勝手が違った。集落の人々とともに、獣害対策用の柵とネットを作る作業から始めなければならなかった。もともと水田だった土地は、水はけが非常に悪く、開墾にはトラクターを使用しなければならなかった。地道な努力を重ね、手塩にかけて育てた野菜が、台風十八号の影響によりほとんど壊滅するという、初めての体験もした。

自分の畑をダメにしてしまった染森さんはがっかりしたが、その年の八月に、種まきトレーで育てた苗を持って各家庭を訪れた。

「白菜の苗、要りませんか？」

これまでホームセンターなどで苗を買っていた集落の人たちは、染森さんの苗を、とても喜んでくれた。水谷に暮らす人々と少しずつ繋がっていく中で、やりがいを感じた瞬間だった。多賀大社駅前では、毎週水・土曜日の午前中、青空市が開れている。農協の規格に合わなかった地元の野菜を集め、価格を下げて販売するものだ。

「私たち協力隊員が来てから、水谷も出してみてはどうかという声があがり、参加することにしました。収穫した野菜を捨ててしまうのはもったいない。少しでも現金収入になるからやってみようと行動に移しました」。

肩を張ることなく、気軽に動き出そうという地域の人の想いをもとに、染森さんは、価格付けや包装を担当、どんなに少なくとも出荷主に売り上げを渡すのだという。

滋賀県への移住を考えている人たちへ

地域おこし協力隊員として水谷で任務する三年の間に、出来る事は限られている。しかし、山あいの集落や水田の美しい景色を取り戻していくことは、協力隊員である自分の誇りにも繋がると染森さんは感じている。どんな中にも人と人との繋がりがあるのだということを、染森さんは水谷での生活を通し、改めて思ったという。

「集落を挟む深く静かな山林、そこからあふれるきれいな空気、大きくはないけれど清らかな渓流…。私はここに自分だけの宝物を掘り出したような気持ちになりました。水谷地域に派遣されたことは、本当にありがたいと思っています」。

山の木々にかこまれた静寂の中、染森さんが残したメッセージが、いつまでも心に響いていた。

右ページ：もっぱら大工仕事をする土間。材木の傍らに練炭入りの段ボールが重なる。
右上：机とパソコンが置かれた仕事場でインタビューに答える染森さん。
中上：ひげが長く警戒心が旺盛な三毛猫「ハム子ちゃん」。
左上：家族歴６年。温厚でおっとりしている「さくらちゃん」。
中：染森さんが育てたキャベツと白菜の苗。近所の皆さんに好評だったという。
下：水谷の農作物作りには、シカやサルなどの動物除けネットが不可欠だ。集落の人たちとともに６月に完成したネットハウス。

ほっと湖東ライフ④ シェアハウス篇

古民家をシェアして住む県大生ライフ

宮崎瑛圭さん・藤澤泰平さん
藤井碧さん
豊郷町吉田

旧中山道愛知川宿と高宮宿の間（あい）の宿として古くから発達した豊郷町。近江商人を数多く輩出した土地としても有名だ。コミュニティ再生に取り組む「ＮＰＯ法人 とよさとまちづくり委員会」の呼びかけで、滋賀県立大学の学生が古民家を改修し、シェアハウスとして住むようになって十年。若者が少なくなった集落のなかで、近所の人たちから孫のように大切にされながら、都会では体験できない温かい日々を学生たちは過ごしている。

とよさと快蔵プロジェクト

磯部邸に暮らす三人は、いずれも環境科学部環境建築デザイン学科に所属する学生だ。出身地は、宮崎さんが滋賀県大津市、藤澤さんが香川県高松市、藤井さんが京都市左京区。それぞれの思いから県大を選び、環境・人間・建築の関わりについて学んでいる。なかでも宮崎さんは、オープンキャンパスで「とよさと快蔵プロジェクト」の存在を知り、入試前に先輩の案内で豊郷町を訪れたという。そして自分も大学生になったら地域活動に参加しながら、生きた建築について学びたいと考えていた。

「とよさと快蔵プロジェクト」は、平成十六年から滋賀県立大学が導入した新しい教育プログラム「近江楽座」に認定された学生主体の地域活動である。コミュニティ再生に取り組む「ＮＰＯ法人 とよさとまちづくり委員会」の学生メンバーとしてイベント企画や空き家の改修などを手伝いながら、地元の人たちから新住民として温かく迎えられた。

右上：とよさとまちづくり委員会と県大教員、学生たちによる話し合いから、空き家を改修してシェアハウスにするプロジェクトが立ち上がった。
右下：磯部邸の玄関側から見た磯部邸東側のファサード。
左上：先輩たちが地元の大工さんとつくった磯部邸のアイランドキッチン。
左下：宮崎さんの部屋で取材を受ける県大生。右から宮崎さん、藤澤さん、藤井さんそれぞれの部屋が独立していて、自由に使える気安さがシェアハウスの良いところだという。

初めて古民家暮らし

先輩たちが、地元の大工さんの指導を受けながら屋根瓦の葺き替え、土壁や天井の補修、キッチンやトイレを改修してつくりあげたシェアハウス。その住人として初めて古民家暮らしを体験する彼らは、自分の部屋にそれぞれ本棚をつくったり、ベッドを入れたり、ハンガーを置いたり、適度に手を加えながら住みこなしている。

彼らの住む部屋は二階で、一階はコミュニティスペースとして、地域の人たちがいつでも自由に出入し、過ごせる空間となっている。お茶を飲んだり、テレビを見たり、近所話をしたり、孫のような学生の面倒を見てくれる。冷蔵庫には、いつの間にか野菜や飲み物が入れられていることもあるという。

宮崎さんが古民家に興味を持ったきっかけは、祖父の家で過ごした幼い頃の体験からだ。柱、梁、天井など建物の構造が目で見えることや経年による木材や土壁の味わいなど、古民家には、規格化され、工場で生産されるハウスメーカーの住宅とは異なる魅力がある。光や風が通り、健康的で再生可能な建築の魅力について、授業で学んだことを自分の住む家で実感

右ページ：宮崎さんのインテリア。建築を学ぶ学生らしく照明などにもこだわってオシャレに住んでいる。
右上:家の一階は地域の人たちと学生たちの団欒の場に。炬燵に入ってお茶を飲みながら、自分の家のお茶の間でくつろぐようなひとときを過ごす。
右中：とよさと快蔵プロジェクトの学生が毎週土曜日の夜オープンしているBar タルタルーガ。地元の造り酒屋「岡村本家」の敷地内の蔵を改修してつくりあげた。地域の人たちが気軽に立ち寄れるところが人気のようだ。
右下：「岡村本家」(1854 年（安政元年）創業）の酒蔵。見学者に開放するほか酒蔵の 2 階を「蔵しっく館」ホール・ギャラリーとして活用するなど、豊郷のまちづくりを支援してる。
上中：学生たちがとりわけお世話になっている西山和子さん。すぐお隣ということもあり、自分の孫と同世代の学生たちを優しく見守る。
左上：庭先の煉瓦造りのピザ窯は、ピザパーティの主役だ。

外で会ったらこんにちはと挨拶するおばあさん、お母さんとその子供。当たり前のように近所づきあいがある。

藤澤さんは、まちづくり委員会メンバーとのお付き合いが楽しいという。近くにある酒蔵岡村本家の敷地内にある「タルタルーガ」。これも古い蔵を先輩が手伝って改修し、学生が交代しながら週末のみ営業する「蔵バー」である。そこによく行く藤澤さんの話し相手は、五十代の人。二十三歳の学生と相手との話の内容から、二人が親子でないことはすぐにわかるので、どういう関係ですかと聞かれることがしばしばあるという。その時の答は「友達です」。相手の人も自分もそれでとても満足している。

古民家暮らしの思い出が蘇る日

伝統的な集落の古民家に暮らしながら、学生たちはいろいろなことを学んでいる。高齢化が進む集落コミュニティの実情、そうしたなかで少しずつ増加している空き家の存在。木材、瓦、土壁など自然素材でつくられてきた建築文化が消滅するかもしれない時代の空気。こうした状況は、滋賀県に限らず、日本の各地で進行しつつある共通的な課題である。

琵琶湖のほとりで建築や生活文化を学びつつ、湖東の古民家暮らしを経験。これから社会人となり家庭を持った頃に、懐かしさを伴ったよき思い出として蘇る日が、きっと訪れるに違いない。

しながら確かめることができる。

藤井さんは、蔵を改修したシェアハウスに住む先輩を見て、自分も住みたいと思ったという。実際に住んでみて、マツやヒノキの良い材料を使って建物が建てられていることや、柱や梁の接合部など熟練した大工さんの仕事ぶりに感動している。その一方で、夏を旨として建てられた木造家屋の冬の寒さは、相当にこたえているようだ。室内で氷点下になることがあるという。冷蔵庫の野菜庫の設定温度は、四度位なのでそれよりも低い！寒さ対策のために断熱材をいれてみて、厚さが二十ミリメートルほどの薄い断熱材でもこれだけの効果があるんだと、授業で学んだ断熱効果の高さを実感している。

先輩から後輩へ。引き継がれる地域とのきずな

シェアハウスで暮らすライフスタイルが都市でも注目されているが、それと共通する何かが自分たちの暮らしにあるという。自分ひとりではない安心感。生い立ちや個性の異なる人間同士が、ある時期、共同して住む。それぞれの持つ交友関係が、水の波紋のようにゆるやかにつながり、ひろがっていく。磯部邸では、一階のコミュニティスペースを世話する人や近所の人たちとのつながりが生まれる。部屋に上がり込んで面倒を見てくれる気安さが、学生たちは心地よいという。

ほっと湖東ライフ⑤ Uターン篇

東京からUターン。農業家を目指す

「野菜をつくるということは、人と大地をつなげるということ」。落ち着いた面持ちで話すのは《レイクサイド・ビジュー～湖のほとりの小さな宝箱～》を立ち上げた西村健之さん。西村さんは、まちなかで気軽に菜園づくりが楽しめる管理指導付き体験農園《げんぼく☆ファーム》の運営や《滋賀大うちごはん農園》プロジェクトに係わりながら、農的暮らしの実現に夢を託す。都会で気付いた「大切な宝物」は、生まれ育ったふるさとにあった。

西村健之さん
彦根市大堀町

自分で何かを生み出す

誰もが憧れる大都会での暮らしを後に、生まれ育った琵琶湖のほとりに西村さんが帰り着いたのは十六年前、二十八歳の時だった。

大学を出た後、東京の会社に就職。人事部に配属された西村さんを待ち受けていたのは、いわゆる「リストラ」の仕事であった。何十年も会社に尽くしながら会社に翻弄された人々の末路をまざまざと見せつけられ、「人の生き方」そして「自分の生き方」について、改めて考え直したという。そんな中で西村さんは、ある答えに行き着いた。それは、「地に足を付けて、自分で何かを生み出す」ということの大切さだった。

滋賀に戻った西村さんは、まず地元の製材関連会社に就職。そこで出会った社長の後押しもあって、『農業』の道を選び、独立した。そうして《レイクサイド・ビジュー～湖のほとりの小さな宝箱～》は生まれた。

確固たる想いを抱き、Uターンを決心した西村さんは、なぜ故郷の地、湖東地域を選んだのだろう。西村さんは、代表をつとめるレイクサイド・ビジューについて、次のように語ってくれた。

「レイクサイド・ビジューとは、《湖のほとりの小さな宝箱》を意味します。湖は、もちろん私の大好きな琵琶湖。その琵琶湖のほとりに、たくさんの野菜たちが輝き、それを囲むたくさんの人々がきらめく。宝箱のような場所を作りたい。それが、私の目標です。宝箱には、高価な宝石は入っていません。身近な自然とそれを通じてつながり合う人々の笑顔があふれます。レイクサイド・ビジューは、そんな素敵な場所を提供していきます」。

人と人とのつながり

彦根市内の一角に二〇〇坪ほどの土地がある。そこが西村さんの運営管理する体験農園《げんぼく☆ファーム》である。区画数は、二〇区画、利用者は現在七人で、徐々に増えている。西村さんは、農事組合法人の農作業を手伝う傍ら、週末を中心に農業指導を行いながら会員利用者との交流を楽しんでいる。

しかし、農地も資本もない、全くゼロからのスタートをきった西村さんの新しい生活は、決して順調ではなかった。実

右上：「げんぼく☆ファーム」の農園区画を耕耘する西村さん。赤いつなぎ服は、西村さんのトレードマークだ。
右下：会員の作業を見守りながら、適切にアドバイスする。
左上：「げんぼく☆ファーム」の農園オフィス。会員との打ち合わせや農作業の休憩スペースとして大切な空間だ。
左下：オフィスの板壁には、農園主からのメッセージの言葉が。

上：松原地区は、彦根市の北部に位置する農業振興地域。野菜を生産するハウスが並ぶ一画に、西村さんが春から農業活動を開始する農地がある。北は、米原方面。奥に伊吹山（標高 1,377m）の美しい山容が見渡せる。

際に農業と向き合った西村さんは、様々な壁にぶつかることとなる。真剣に向き合えば向き合うほど、自然を相手とする仕事の難しさを初め、日進月歩の農業技術、経営、流通などの厳しい現実を目の当たりにした。

「農業は一人ではできない…」。

思うようにいかない農業と立ち向かう日々が続くなかで、西村さんを支えてくれたもの。それは「人と人とのつながり」だった。平成二十四年九月、西村さんは、レイクサイド・ビジューの活動を続けながら、滋賀県立大学の人材育成プログラム『近江環人』に応募し、地域づくりのリーダーに必要なスキルと人的ネットワークの拡大について学び直した。

次の年の春、大学の近くにある彦根市下石寺の集落営農の担い手として、働くチャンスを得た。そこで農作業に従事しながら、農業で自立していくためには、大規模で集約的に生産可能な農作物の選択と流通という、乗り越えがたい大きな壁の存在に気づかされた。農業家としての生き方を日々探し求めるなかで、西村さんが得たもの、それは「人と人とのつながり」の大切さであった。

『滋賀大うちごはん農園』プロジェクト

西村さんは今、滋賀大学の学生活動である『滋賀大うちごはん農園』プロジェクトで、月に一度、野菜づくりの講座を担当している。このプロジェクトは、主

右上：春から耕作を開始する西村さんの農地。彦根のまちなかから約 1.5km の距離にあるので、これからの活動には何かと便利。市民や学生たちとの農作業をとおした交流に夢が膨らむ。
左上：琵琶湖岸の東側に拡がる松原地区。かつては琵琶湖の内湖であった。『滋賀大うちごはん農園』の圃場もこのなかにある。
左中：西村さんが農作業に係わっている下石寺の野菜生産農地。
左下：滋賀大学で学生たちとともにつくった野菜で、ごはんづくりにチャレンジする。

に自炊生活を楽しみたい滋賀大学の学生たちが、「自ら野菜を育て、自ら食す」という考えのもとに立ち上げたものだ。専門家の指導を受けながら、みんなで野菜を栽培し、うちごはんのレシピをつくり、健康的な学生生活を送る実践的な活動である。西村さんは、学生と共に過ごす時間のなかから、彼らの素朴な「疑問」や素直な「感動」など、沢山の言葉や表情に出会うこととなった。泥だらけになりながら畑の土と野菜に向き合うなかで、西村さんは、仲間を増やし、後進を育てることの喜びを知った。そしてこの体験を次のチャレンジにつなげたいと思った。

『滋賀大うちごはん農園』プロジェクトが活動する畑は、彦根市松原町にある。かつては松原内湖があり、琵琶湖の一部であったこの一帯は、大正末期から戦後にかけて農地として干拓された土地だ。昭和二十三（一九四八）年に干拓が終わってから、六〇年以上にわたり露地やハウスで野菜が生産されてきたが、現在は、耕作されずに放置された農地が目立つ。学生たちと農作業をしながら、そんな光景を見る度に、西村さんは「なんとかしたい」と思っていた。

地方の多くで限界集落の問題や農業後継者の不足などの問題が語られているが、西村さんはまず、自分の周りの地域再生から取り組みたいという。「農業では食べていけない上」そう言われることもしばしばあるが、大量生産で無ければ農業は成り立たないという状況を、いつか打破したいと考えている。

松原地区の一角で、西村さんの新しい農的暮らしが始まる日は近い。